

浜松の歴史 基本テスト

1. 静岡県西部地域の古い呼び名「遠江」は何と読みますか。

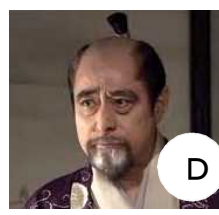
2. 静岡県人の県民性を表す「遠州□、駿河乞食、伊豆詐欺」という言葉。□に入る語句は？

3. 本州で最も古いとされる人類化石「浜北原人」。何時代の人？

4. 浜名湖を作ったとされるもののうち、関係無いものはどれ？

巨人／法螺貝／地震／うなぎ

5. 次のの中から浜松時代の徳川家康を2つ選んでください。



6. 浜松時代の徳川家康について、次の文章の空欄を埋めてください。

家康は□あ□の出身。最大の強敵□い□と戦うために浜松に引越し29歳から45歳までの□う□年間を過ごした。元龜3年(1573)の三方ヶ原の戦いは結果は□え□だったが、家康にとって得る物のとても多い戦だった。この戦いで家康は各地に数十もの愉快的伝説を残している。浜松の伝説で家康は□お□と呼ばれ、中でも□か□を食い逃げして怖いお婆さんに追いかけられた話が有名。三方原では散々だったが、家康の率いる兵隊の精強さは東海一と言われ、中でも“徳川四天王”の勇猛は全国に鳴り響いた。四天王のうち□き□だけが浜松出身の人物である。浜松在住時代に徳川家康が天下取りの基礎を作ったので、浜松城は□く□と呼ばれている。

出世城／ボロ負け／井伊直政／岡崎市／あずきもち／武田信玄／ごんげんさま／17

7. 次の地図のうち「姫街道」はどれですか。



8. 「遠州七不思議」のうち2つ挙げてください

9. 浜松にルーツを持つ自動車企業の名を2つ挙げてください。

10. 第二次大戦に浜松が空襲された回数は、公式には何回ですか？

11. 戦中、「陸軍技術研究所館山寺分室」で研究されていた兵器は何ですか。

12. 次の文章の□に数字を入れてください。景勝地として知られた館山寺に、初めて旅館ができたのは大正□A□年(今の山水館欣龍)。花乃井は昭和□B□の開業。当初は「見晴館」として山水館の向かいにあった。昭和34年浜名湖遊園地が建設された事で館山寺の旅館業の最盛期が始まり、その頃温泉が現在の九重の場所で発見され話題となった。しかしこの最初の源泉の温度は□C□℃であった。花乃井は昭和□D□年に現在地へ移転した。

1 とおとうみ	2 強盗	3 旧石器時代
4 うなぎ	5 A と C	
6 あ=岡崎市 え=ボロ負け か=あずきもち く=出世城	い=武田信玄 お=ごんげんさま き=井伊直政	う=17
7 ②	8 (省略)	(省略)
9 ホンダ	スズキ	
10 熱線吸着爆弾	11	27回
12 A= 13 D= 41	B= 28	C= 10.6

浜松の歴史基本テスト 解答と解説

がんばって読んでくださいね

1. (答) とおとうみ

「ととうみ」や「とおとおみ」ではないので注意。

古くは「遠淡海」といった。

平安時代まで三河・遠江までが大和朝廷の支配する安全な勢力圏と考えられ、駿河以東は荒々しい「あずまえびす(東夷)が住まう危険な地」と呼ばれました。浜名湖の河口「橋本宿」(現在新居町内)は当時の人々が考えた文明圏(朝廷の権力の及ぶ範囲)の境界線と考えられていました。

遠江国の範囲は西が湖西連峰、東が大井川までで、大井川は時おり流路を変えたので、遠江の領域もその都度変わりました。御前崎は遠江です。

北は現在水窪町までですが、平安時代には水窪と佐久間町は信濃の国だったとする史料があります。(『三代実録』)

「遠江国」を短縮した「遠州」という語句がよく使われます。でも他地域から旅行に来る人には聞き慣れない響きらしくて、フロントで「エンシュウ?」と聞き返された事が幾度かありました。国名としては「美作国」「周防国」「摂津国」「石見国」と同じぐらいのマイナー国名です。

用語例としては遠鉄(=遠州鉄道)、遠信(=遠州信用金庫)、遠トラ(=遠州トラック)、遠州灘、遠州弁、西遠女子学園、遠州大念仏、小堀遠州(※人名)、遠州流茶道・華道、などがあります。

2. (答) 「遠州 強盗」、駿河乞食、伊豆詐欺」

良い表現ではないので問題文とするのが非常に心苦しいのですが、昨今の「県民性ブーム」で刊行された本の多くに、静岡県民を説明する言葉としてこれが取り上げられています。「とても温暖で作物に満ちあふれた静岡県。それでも食うに困ったら遠州の人は積極的行動に出る。保守的な静岡市の人は何もしたくないので身内にたかる。伊豆はノンキで外からも良く来るので、無邪気に人に付け込む」。最後の伊豆の件はいわゆる「観光地価格」「ボッタクリ」のことを指していますが、詐欺ではなく「伊豆餓死」(伊豆の人は死にそうになっても流れに身を任せる)としている本もあり、それはそれでそれらしいです。また、浜松も元々は「強盗」ではなく「遠州泥棒」だったそうなのですが、昨今の時勢を汲んで(恥ずかしながら浜松は事件が多い)、「強盗」と変わったようです。

人に浜松を説明するとき、「浜松人の性格は強盗ですよ」と説明するのはさすがにマズイですが、ほぼ同じ意味でその積極性を表わした言葉に「やらまいか精神」というのが

ありますので、ぜひこれを活用して欲しいです。浜松以外の人には良く意味のわからない語句ですが、「いっちょやってやるぜ」「そんなに言うならオレの仕事を見て腰を抜かせ」という意味で、浜松人は実際によく「やらまいか」と言います。

平成23年は市制100周年。それに向けて浜松市の公式web

に掲げられたスローガンは「未来へ輝くやらまいかスピリッツ！NEXT100」。

浜松市は毎年数人の「やらまいか大使」というのを任命しており、現在公式サイトで大々的にアピールされているのが2008年就任の寛利夫氏(丸塚中・東高出身;大使に任期は無いようです)。“大使”は現在45名近く。なかなかそうそうたる顔ぶれです。浜松はとても人材が厚いのです。大使の中には現静岡県知事の川勝平太氏(2009年任命)やJAL会長の西松遙氏(北高出身)など、意外な人もいます。

3. (答) 旧石器時代



“旧石器時代”とは、大さっぱに言うと「土器が出現する以前の人類の時代」です。別名「先土器時代」。(※正確には旧石器時代の末期に人類は土器を使用するようになりました)。

日本では独自の土器を使う文化が高まった時代を“縄文時代”と呼びます。人類が初めてアフリカで石器を使った240万年前から縄文時代の始まる1万2千年前までの極めて長い期間が、“旧石器時代”です。

日本では長らく「縄文時代以前に人は住んでいなかった」とされてきました。80年ぐらい前に初めての発見があり、昭和30年代に発掘のブーム。“三ヶ日人”と“浜北原人”もその頃発見されました。

技術の発達と、2000年に世をにぎわした「旧石器遺跡捏造事件」(=日本の旧石器時代の遺物のほとんどが一人の人物によって作り出されたニセモノであることが発覚した)によって、旧石器時代研究は新たな段階に入っています。研究の結果、「明石人」(兵庫県)、「牛川人」(愛知県)、「葛生人」(栃木県)、「聖岳人」(大分県)、「三ヶ日原人」(静岡県)はどれも旧石器時代の人ではないということになり、(※三ヶ日人は発見された時はネアンデルタール(旧人)段階にあるヒトと判断されたが、現在は縄文時代の人と修正されています)、浜北人と港川人(沖縄県)だけが真正の旧石器時代人と考えられるようになりました。

旧石器時代の遺跡は全国各地にあります。人類の化石として確実な旧石器時代人は、本州では浜北原人のみです。(※但し近年、沖縄近辺で旧石器時代人骨が相次いで発見され、注目を浴びている)。

旧石器時代の人類化石は「日本人はどこからきたか」という

問題の解答を示す、とても大事な物です。浜北人骨は昭和37年に旧浜北市の根堅洞窟から発見されたもので、研究の結果、1万4千年前のもの下に1万8千年ほど前の骨が存在していたことが分かりました。1万4千年前の化石は20歳ぐらいの若い女性。研究報告では「縄文人に極めて似ている」とのことですが、なぜか浜北“^{ねがた}原人”と呼ばれています。この浜北人が50万年前の北京原人と同じ形態の物であるはずがないのですが、日本では縄文時代以前の人々はみんな「原人」と呼ぶ慣習があるようで、「**浜北原人**」という呼び名は間違いじゃないそうです。

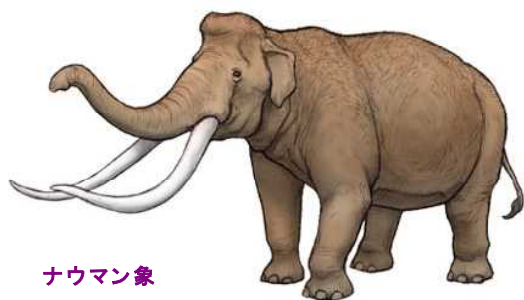
最近の研究で、「縄文時代が始まった時期」がどんどん遡っており、ウィキペディアでは「縄文文化は流動的ではあるが1万6千年前から」としてあります。(20年前の教科書では「縄文時代は1万年前から」でした)。しかし「浜北人は旧石器時代人」とする見解はまだ変わっていないようです。



浜北人化石は立派なトラの化石と共に発見されました。これは別に「浜北人がトラに食べられた」とか「逆に浜北人がトラを食べていた」ことを意味しないようです。三ヶ日人も同様にトラやアオモリゾウの骨と一緒に発見されています。

浜松はまた全体に**ナウマン象**やワニの化石もたくさん発見されています。旧石器時代の浜名湖周辺はサファリパーク状態だったのかもしれませんが。

「本州**唯一の貴重な存在**」なのに、浜松市民でもほとんど浜北人のことは知りません。むしろ**三ヶ日原人の方が知名度が高い**です。明石原人の明石市や栃木県では、毎年盛大に「明石原人まつり」「くずう原人まつり」「秩父原人まつり」をおこなっているというのに・・・



ナウマン象

4. (答) 浜名湖を作ったのは巨人、ホラ貝、地震と津波 (うなぎは違う)



浜松の伝説で有名なのは「巨人の**ダイダラボッチ**がとてつもなく高い山(富士山)を作ってやろうと思いついて、琵琶湖の所から土を掘り出し、箱根の付近まで運んだ。その真ん中の地点でひとやすみした巨人が手をついた場所が、浜名湖となった」というもので、実際に複雑な浜名湖の形が変なてのひらの形になっているので、浜松の子供たちは驚嘆したものです。

浜松の伝説では大量の土をもっこを地面に置いて弁当を食べ始めた**ダイダラボッチ**、入っていた小石を**プツ**と吐き出したのが奥浜名湖にある**つぶて**礫島。このときもこの両方からこぼれた土が、大草山と根本山になったということです。とすると、巨人がお尻をおろした場所はちょうど花乃井のあるあたりだっただろうと思います。

浜名湖の**ホラ貝**伝説も有名なものです。「深山には巨大な法螺貝が棲んでいて、3000年生きた法螺貝は空に上がって龍になる」という伝説が全国各地にあるのですが、どうしたわけか深山でもない場所に巨大な法螺貝がいて、彼がどうとう飛び出して龍になったとき、それが抜け出した穴に海水が流れ込んで今切れ口となった、とするものです。



この**出世法螺**の話は水木しげるの本には必ず載っています。今は空前の水主しげるブームなので、この話を知っている人は多いかもしれません。

実際の浜名湖の複雑な形の生成過程について、どうしてこんな形になったのか、どうやって湖の形になったのかを説明するのは難しいです。本によって書いてある事が違うのです。最終的に戦国時代の初めに**明応の大地震**(1498年)が起こって大津波によって今切れ口が開き、膨大な海水の流入で浜名湖は現在の形になりました。

大地震前はこの浜名湖河口はとても安全な場所で交通量も多かったのですが、地震以後容易に通れなくなり、浜名湖北岸を通る本坂峠越え(現在の姫街道)が一般的となりました。源頼朝が平家軍を討伐したとき、また後醍醐天皇が足利尊氏を対退治するとき、20万を超える大軍が通ったのは新居口からでしたが、徳川家康が遠江に侵攻した時は、今切は通れなくなっていたので、本坂峠から討ち入りました。

5. (答) A と C

(A).家康のしかみ像

三方原合戦の敗戦の屈辱をいつまでも忘れぬよう、やせ細った自分の姿を画家に書き取らせた、とても有名な像です。現在は名古屋の徳川美術館にあります。

(B).東照大権現像。

日光東照宮蔵。目が特徴的です。征夷大將軍としての姿。

(C).浜松城にある「若き日の徳川家康像」

市制70周年と浜松市観光協会創立30周年を記念して「徳川家康若き日の銅像建設委員会」により昭和56年に作られたものです。浜松城天守閣内の入口にある石像と、天守閣前の広場に立っている同じ顔の青銅像の2つがあります。

(D).2000年のNHK大河ドラマ『葵三代』で徳川家康を演じた津川雅彦

徳川家康は超重要人物ですので、戦国時代を描いた作品には家康は必ず登場しますが、超重要人物なので作品毎に異なった性格付けがなされます。

NHK大河ドラマで主人公として選ばれるとその舞台となった土地に及ぼされる経済効果は凄いらしく、直江まつりや龍馬まつりなど、その都度その土地は大変な事になるのですが、浜松の徳川家康は毎回登場するのに浜松ではそれによって騒がれることは一切無いです。おかしなことです。

個人的には2000年の大河ドラマの徳川家康が最高だと思います！ ただこの作品は関ヶ原の合戦を丹念に描いているので、浜松時代の家康ではないです。

2011年の徳川家康は北大路欣也だそうです。



6. 浜松での徳川家康について

浜松と家康

今回この問題を作成するに当たりどんな問題にしようかとかなり悩みましたが、「**浜松と家康の関係を述べるだけで浜松人の性格はおおむね説明できる**」と思ひ、徳川家康問題の比重を高める事にしました。

要点を簡潔に述べると、

・徳川家康はよそから来た人間である。家康に限らず浜松で語られる偉人のほとんどがよそから来た

人間である。(※本田宗一郎(天竜市出身)だけが例外)。
・浜松人は外から来た人に啓発されないと何もしない傾向がある。しかしいったん始めるとその働きはめざましい。特に技術的な分野が得意。

・よそから来た人(徳川家康・坂上田村麻呂・源範頼・宗良親王・斯波氏・今川氏・ブラジル人ら)を大歓迎する一派が常にある。全体的に進取的。全体的にウェルカムハッピー。

あくまで歴史的に見た浜松人の傾向ですので。念のため。

徳川家康の青年時代

家康は生涯の一番大切な時期の壮年期を浜松で過ごしました。家康が生まれたのは岡崎市。そこは“徳川家康生誕地”として家康と三河武士らを大々的に顕彰していますが、岡崎城主として家康がいたのは桶狭間合戦後の10年間だけです。その倍の日々を過ごした浜松も岡崎ぐらいに大々的に祭り上げてほしいと思うのですが、そうはなっていない。

浜松時代の徳川家康は、常に武田との戦いを迫られていました。武田信玄にとって家康は子供程度の存在でしかなく、信玄相手の戦さでは常に家康は圧倒されていました。**武田信玄**はよく「**戦国時代で最も強い**」と言われますが、浜松での信玄の行軍を見る限り、それは本当だと思います。しかしながら三方ヶ原の戦い直後に信玄は急死してしまい、信玄がいなくなってみると、家康は「全国でもかなり戦争に強い大名」として注目されるようになっていました。信玄相手に負け続けていた4年間に、家康もまた武田流戦術と統治法を学び取っていたのです。



徳川家康という人物は、一般に良いイメージを受けていない歴史人物です。「狸オヤジ」「陰険」「地味」というキーワードで語られる事が多い。しかし浜松での家康に限っては全くの真逆です。この時代の家康は「知恵と勇気と友情」「^{パッション}熱い情熱で大地を駆けめぐる」「若さと賢慮の同居」「打たれても打たれても立ち上がる」「それを支える無数の汗くさい家臣たち」というキーワードで語れる浜松の徳川家康。こんな権現様を拝

めるのは全国でも浜松だけ！

徳川四天王

徳川四天王とは“酒井忠次”、“本多忠勝”、“榊原康政”、“井伊直政”の4人の事です。昨今の「歴女ブーム」でこの4人の人気はかなりなものになっているといえます。

このうち井伊直政だけが遠江(引佐町井伊谷)の出身です。四天王のうちとりわけ人気の高いのは、信玄に「家康には過ぎたもの」といわれ秀吉には「東国一の猛者」と評された**本多忠勝**。とりわけゲームの影響で忠勝ファンは多い。



徳川四天王どころか、徳川十六神将、徳川二十八将の名の中にも遠州出身者の名は井伊直政しかありません。「三河武士の精強は全国一」と言われ、浜松での家康軍の中核もほとんど三河人のみでした。しかしながら、「家康は三河人だけを重用し、浜松人は冷遇された？」という懸念は、井伊直政の存在によってくつがえされます。

家康は部下に対してはかなり渋ちな君主でして、老臣の本多忠勝や榊原康政ですら最終的に10万石しか与えられていないのに、一番若かった井伊直政は「宰相にも匹敵する」と評価され、井伊家は彦根に30万石の領地を与えられています(※注:直政生前中には18万石)。**家康家臣の中で最も出世したのは井伊直政**です。

「井伊氏」は奥浜名湖地区の“井伊谷”に平安時代から土着していた名族。南北朝時代に宗良親王を祭り上げて戦っていた頃がこの一族の最盛期で、戦国時代になると没落し、嫡子として生まれた井伊直政も今川氏の魔の手から逃げ回る苦難の少年時代を送りましたが、たまたま徳川家康に出会ったことによって異例の出世を遂げる事になりました。

ただ、井伊直政は浜松人らしからぬ性格で、気に入らなければ小姓でも即座に叩斬るほどの恐ろしい上司だったそうです。一方で、昨年のゆるキャラブームで話題になった「ひこにゃん」と勇猛なこの井伊直政と、息子の直孝が江戸の豪徳寺で見て「縁起良い物」の象徴とされるようになった「招き猫」をモチーフにして作られた物ですから、浜松でも井伊直政をマスコットとして活用する余地は大いにあります。



徳川家康と浜松武将

では井伊以外の浜松武将は全く不遇であったかという、そうでもありません。**意外に出世していたのは**、ご当地館山寺地区を領していた大沢氏です。

永禄11年(1568年)徳川家康が遠江侵攻を開始した時、半分ぐらいの浜松武将が駿河の今川氏真の側に立って家康に抵抗しました。中でも最も頑強に反抗したのが堀江城(館山寺町)の大沢基胤もとたねでした。本に「基胤は家康という人間が生理的に受け付けなかった」と書かれるほどの家康嫌いで、最後の最後まで家康に抵抗し続けた人物ですが、数年後にとうとう家康からの帰順勧告を受け入れました。

こんな大沢氏を家康は重用しました。基胤が京都の朝廷の縁に連なる女性(木寺宮姫きでらのみやといひます。木寺宮家は高貴な家柄といひながら浜松の入野に在住)を妻にしていたという理由で、幕府の重要な儀式典礼を司る重職に抜擢したのです。この役職を「高家こうけ」といひ、大沢氏以外には吉良氏や今川氏、織田氏、畠山氏、斯波氏、上杉氏など日本の歴史に燦然と名を煌めかす名家が列していました。それらの中で大沢氏が最も格式の高い家とされていました。

家康がどうしてここまで大沢氏を持ち上げたのかは謎です。逆に家康が浜松に侵攻したとき、いち早く家康に帰参してその先導をしたのが“井伊谷三人衆”のひとりであった近藤氏です。その後近藤氏は奥浜名湖一帯を預かり(一度だけ大名となったがすぐに旗本に戻った)、**気賀関所**や**初山宝林寺**・**渭伊神社**などが近藤氏にゆかりのある史蹟で、幕末に新選組を指揮した近藤勇の近藤氏もこの家から出たと言われています。(※正確には天然理心流を起こした人物が浜松で近藤某と果たし合いをして近藤の名を奪い、江戸に道場を構えた家に、勇が養子に入った)

越前67万石の大名となった結城秀康(家康の次男)と2代目将軍となった徳川秀忠(家康3男)も浜松出身者に数えてもよければ、その出世ぶりもなかなかのものでしょう。

(徳川家康の11人の息子たちのうち、次男結城秀康、3男徳川秀忠、4男松平忠吉、5男武田信忠の4人が浜松で生誕しました。)

浜松の権現様伝説

これは調べてみると、びっくりしてしまうほどいっぱいあります。その多くは「今日もごんげんさまが戦に負けて逃げているとき～」という書き出しで始まります。家康は遠州各地で、武田軍やその他の軍から逃げながら、小豆餅を食い逃げしたり、そうめんを食べたり、変装したり、お地蔵様に願い事をしたり、昼飯を10回ぐらいご馳走してもらったり、洞窟に入りまわったり、出会う人出会う人に名字を与えたりして逃げまわっています。『家康の愉快な伝説101話』という本がありますので、きっとその伝説は100以上はあるでしょう。

家康が浜松で、逃げねばならなかった相手は、武田信玄、武田勝頼以外にも、春野町の天野氏や掛川城攻めでの今川・朝比奈氏、浜松侵入の最初の頃の堀川城の戦い(奥浜名湖の農民相手)などいくつか考えられます。

7. 姫街道 (答え) ②

姫街道^{ごゆ}というのは、愛知県の御油から磐田市の見付まで、本坂峠を経て浜名湖の北岸を通り、三方原台地を斜めに横断していく街道。浜名湖南岸を通る東海道に対して、裏街道とされました。

その歴史は古く、沿線にはたくさんの史蹟と情緒ある景観が残っているので、浜松で一番歴史っぽい場所と言って良いです。「姫街道の松並木」は市の史蹟ですが、特に気賀と三ヶ日、それから「本坂峠」には地味だけど見るべき所が多く、歴史的逸話も多いので、「館山寺から手軽に行ける歴史スポット」として、是非おさえておきましょう。

「一里塚」「気賀関所」「犬くぐり道」「姫様道中」「象無き坂」「石投げ岩」「巡礼の祟り屋敷」「引佐峠の石畳」「本坂峠の石畳」など。



地図中の他の交通路は以下の通り。

- ① 東名高速道路
- ② 姫街道
- ③ 東海道線
- ④ 国道一号線
- ⑤ 二俣街道 (秋葉街道)

8. 遠州七不思議

「遠州七不思議」は「越後の七不思議」と「本所七不思議」と一緒に「日本の三大七不思議」に数えられるほど由緒のある物です。ただ、遠州の場合は「七不思議」といいながら、その数が極めて多いのが特徴で、私の手持ちの本の七不思議リストには96個もの物が紹介されています。浜松ではいろんな場所をドライブしていると「遠州七不思議のほにゃらら」という看板に出くわします。聞いた事の無いようなものも堂々と「遠州七不思議」を名乗っていて、七不思議の世界はとても奥が深いです。

花乃井の食事処の名前「^{きょうまるぼたん}京丸牡丹」の伝説は絶対に押さえてほしいものですが、例えば「片葉の芦」は遠州各地に20ヶ所はあるそうですし、「遠州灘の波の音・浪小僧」などは6ヶ所ぐらいに伝承地(御前崎・引佐の四方浄・伊佐見町・相良・浜松市南部の海岸・浜北市)があって、そのそれぞれで全然別の物語をその由来としているそうです。

館山寺町には残念ながら七不思議はありませんが、近くのものとしては「舞阪町の波小僧の像」、「新居町の飛神様」、「弘法大師と波小僧(伊佐見町)」、「気賀の片葉の葦」、「井伊谷の柳の井戸」(所在地すら不明なナゾの不思議)などがありますので、観光情報として結構活用できるでしょう。

☆代表的な七不思議☆

小夜の中山の子泣き石／京丸牡丹／遠州灘の波の音／浪小僧／桜が池のお櫃納め／相良の子生まれ石／粟ヶ嶽の無間の鐘／片葉のアシ^(20ヶ所ぐらい伝承地がある)／三度栗^(5ヶ所ぐらいに伝承地がある)／犀が崖のかまいたち／天狗の火 …などなど



9. (答え) ホンダ と スズキ

浜松の産業

現在では工業都市として知られる浜松市。問題文では自動車産業を出題しましたが、浜松人に言わせると浜松は「自動車の町」というよりもむしろ「オートバイの町」だそうで、でも自動車やバイク以外にも様々な産業が集中している全国でも有数の産業都市となっています。歴史的に言えば、浜松近辺から**豊田佐吉**(トヨタの祖)、**山葉寅楠**(ヤマハの創業者)、**本田宗一郎**(ホンダの創始者)、**鈴木道雄**(スズキの創始者)、**高柳健次郎**(テレビの父。浜松ホトニクスの創立に関係がある)などの偉人がたくさん出たことが大切な事です。これらの人たちの生涯は、本が何冊も出ているほどドラマティックなものです。

上の人物のうち山葉寅楠だけが和歌山県出身の人で、彼が浜松に来たのは本当に偶然だったみたい。しかしこれらの人たちに共通しているのは、「これから伸びる産業は何か」を見据え、膨大なアイデアとたゆまざる努力によってトップ企業へとたどり着いていったことです。

浜松が現在のような工業都市となった理由として、「明治・大正時代に浜松では綿産業が盛んだったから」と本にあり、とりわけ館山寺のある庄内半島と浜名湖岸は養蚕の中心地だったそうです。(現在ではその痕跡は微塵もありません)。

「国産ピアノは 100 % 浜松製」、「国内の軽自動車の 6 割は浜松製」、「ヤマハ・ホンダ・スズキの 3 社で国内のバイクの 9 割を生産」だそうです。

(※ただしホンダもヤマハも浜松外に移転している)



鈴木道雄のスズライト

高塚町にある「スズキ歴史館」や二俣町にある「本田宗一郎ものづくり伝承館」は、スズキファンやホンダファンからは聖地として人気が高いのだとか。

10. (答え) 浜松が空襲された回数は、公式には 27 回 (※浜松市 web サイトによる)

浜松は第二次世界大戦中、異様にアメリカ軍から空襲や艦隊からの射撃を受けました。公式に言われている空襲回数

は27回ですが、実際には小さなものを合わせると60回を数える事ができるそうです。104回の空襲があった東京や64回の名古屋など大都市と較べてみても、「異例に空襲を受けた都市」と言ってもいいようです。

浜松がこんなにたくさんの空襲を受けた理由として、(1).工業都市浜松では戦争中多くの工場軍需物資を作っていて、また中島飛行機の浜松工場もあったからよく標的とされた (2).アメリカ軍の爆撃部隊は太平洋から日本列島に入る時、浜松のある付近を侵入口として設定しており、ここから全国諸都市への空襲に向かった。帰還ルートも同様であり、浜松付近から太平洋に出るため、他の都市の空襲で余った爆弾を浜松で捨てた という点が上げられるのだそうです。観光情報として、戦争の話はなかなかできないものでありますが、浜松という町の特性として知っておいた方がよい情報であると思います。

浜松の空襲を学べる場所として、浜松中心部の利町に「**浜松復興記念館**」があります。

11. (答え) 陸軍技術研究所館山寺分室で研究されていた「熱線吸着爆弾」

空襲には全く対応できなかったようですが、浜松近辺にたくさんの陸軍と海兵隊の部隊が展開されていて、また浜松の高い工業技術を反映してか、さまざまな軍事技術が研究されていました。なかでも有名なのが「浜松での毒ガス研究」と「館山寺での熱線吸着爆弾の研究」です。

「**熱線吸着爆弾**」という名前は難しく聞こえますが、簡単に言うと「熱を感知してそちらの方(例えば敵の戦闘機のエンジンとか戦艦の艦橋とか)に自動で進路を修正しながら飛んでいく、いわゆる誘導ミサイル」のことです。どのくらいレベルで実用化されていたのか分かりませんが、浜名湖湖上でさかんに実検がなされたといえます。

戦争中、研究所の分室が置かれた館山寺地区には管制が敷かれ、山水館と喜楽が兵士たちの宿舎とされました。

おもしろそうな逸話として、「この技術研究所には、のちにソニーを創業する事になる**井深大**と**盛田昭夫**が技術者として属していて、館山寺で研究していた」というウワサがあります。(ただしこの任務は極秘だったため、詳細は不明です)

この件とは関係ありませんが、浜松の毒ガス兵器の多くは浜名湖に投棄されて処分され、戦後になって誤って引き揚げられて死者が出たとか、猪鼻湖の瀬戸の先に日本軍の四式中戦車チトと97式中戦車、カナダ軍のウィンザー・キャリアーの3台の戦車が沈められている、、、 などの話が有名です。

1 2 館山寺温泉の歴史

明治40(1907)年、浜松鉄道株式会社開業。現在の遠州鉄道大正5(1916)年頃、浜名湖の遊覧船事業競争が苛烈に。

大正13(1924)年、当地で土産屋と料理屋を営んでいた新村氏が「山水館」を開業。館山寺温泉の旅館業の始まり。昭和2~7年、旅館喜楽(創業者は元警察官)と小波館(さざなみ館の前身。創業者は割烹料理屋。元々の場所は山水館の隣り)が開業。

昭和9(1934)年、館山寺ホテル(九重の前身)創業。

昭和12(1937)年、この頃の館山寺は自殺の名所として有名。館山寺巨大聖観音像建てられる。

昭和21(1946)年、館山寺地区が軍から解放される

昭和24(1949)年、遠鉄が館山寺地区の開発を始める

昭和28(1953)年、館山寺観光協会設立

旅館・**見晴館**^{みはらしかん}(花乃井の前身)創業

創業者は当地の土着者で農業をしていたが、しばらく前に飲食業を始めていた人。

当初の場所は山水館の向かいで、10室程度の宿だった。

昭和29(1954)年頃、戦後の混乱から立ち直る

昭和33(1958)年、館山寺観光ホテル(現在の九重)の入口付近で、館山寺の第一源泉発見

昭和34(1959)年、浜名湖遊園地開業。

昭和35(1960)年、館山寺ロープウェイ開業

昭和37(1962)年、ロープウェイが故障して湖上に6時間宙づりになる事故が起こり、これが全国的ニュースとなって館山寺温泉の知名度が上がる

昭和39(1964)年、東海道新幹線と館山寺街道開通

館山寺温泉の第一次隆盛期

昭和40年(1965)年、ビューホテル(開華亭)開業。現在地？

創業者は鰻屋をしていた人。

昭和41(1966)年、見晴館が現在地へ移転し**レイクホテル**と改称。現在のベイストリートが開発されるようになった端緒。

昭和45(1970)年、浜松フラワーパーク開園。

鞠水亭が伊東から移転。

弁天島の高砂園が移転しサゴーロイヤルとなる。

昭和46(1971)年、浜名湖遊園地はパルパルと改称。

昭和47(1972)年、遠鉄ホテル・エンパイヤ(現在のウェルシーズン浜名湖)開業。

昭和52(1977)年、館山寺第二源泉を現在のパルパル内に発見。湯温は19.3℃。

昭和58(1983)年、浜松動物園が浜松城内から現在地へ移転

昭和62(1987)年、館山寺国際観光ホテルを遠鉄が買収して九重とする。

平成元(1989)年、フラワーパーク西側で館山寺第三源泉発見。湯温は地下1000mで34.8℃、地表付近で25.5℃。現在の館山寺温泉のお湯をほとんど供給しているのがこの第三源泉である。

平成6(1994)年、浜松動物園にゴールデンライオンタマリンが満を持して登場！

平成9(1997)年、レイクホテル完全リニューアル。「**館山寺レイクホテル花乃井**」と改称。66室。

平成10(1998)年、パルパルのマスコットキャラクター達を、やなせたかし氏が生み出す

平成11(1999)年、浜名湖オルゴールミュージアム、オープン

館山寺の源泉について

館山寺は江戸以前の西行法師の時代から“景色の美しい場所”として知られていて、旅館などなくても多くの人が訪れていたのです。昭和初期、旅館経営が始まって、ますます旅客は増えても、景色さえあれば温泉など不要のものでした。

ところが昭和30年代に館山寺地区に簡易水道が敷かれるようになると、奇妙なことがわかります。もともと館山寺は地下水が豊富で、夏冷たく冬は温かい井戸水の恵みを住民は享受していたのですが、いざ簡易水道が通ってみると、館山寺地区の水道の温度は浜松の他の地区よりも温かいことがわかったのです。当地の人たちは「きっとこの付近に温泉があるからにちがいない」と考えました。

ただちにこれを「**観光の目玉としよう**」と当地の**有志のものが**集まり、そこら中を掘りまくりました。しかし残念ながら、どこを掘っても温かいお湯は現れませんでした。しかし、現在の温泉法(昭和23年制定)では「温泉は摂氏25℃以上」と定められているのですが当時はその認定はゆるやかだったらしく(?)、一定の鉱物を含んでいれば温泉と認められたので、その成分分析表を提出し、見事、館山寺温泉は(第一源泉の地表温度は10.6℃しか無いのに、すこぶる冷たいのに)、**西遠有数の温泉郷**として売り出すことになりました。

大丈夫！ 40年後の平成元年に湧き出た第三源泉は無事に温泉法をクリアしましたからね！(それでも地表温度は25.5℃)